

「私たちの十五歳の頃」

東日本大震災から5年目に入ります。私たちの住む会津地域には双葉郡から多くの人が避難してきました。私たちは、生まれた土地に育ち住んでいます。いま避難している人には、「ふるさと」はまだまだ遠くにあります。

今回、大熊町地域学習応援協議会の事業として、大熊のみなさんの十五歳のころを聞き書きしました。それは、大熊の子どもたちに地域の事、そこに住んできた「思い」を理解して欲しかったからです。

この事業は、会津大学短期大学部の学生と、特定非営利活動法人寺子屋方丈舎のスタッフが聞き書きを行いました。大熊の子どもたち、そして、地域のみなさんの何らかの記録になれば幸いです。

主催…大熊町地域学習応援協議会

2014年(平成26年度)文部科学省

学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業(委託事業)



語り手
塚本英一さん
(73歳・町区)

大熊での暮らし

会津は雪があるけど、浜より風は冷たくねえな。雪はな、大変だけども。

俺が4歳の時に第二次世界大戦で町に爆弾が落とされて、みんな防空壕に隠れたなあ。でも、飛行機が気になって、数人で防空壕から出て、空見上げてきやつきやついたら、どっかのじいさんに怒られたなあ。「お前たちが出てたら見つかるだろ」って。

コレートなんかそんとき初めて食べたんだ。うめがったなあ。そのうち、アメリカ兵がジープに乗って来ると、手出して待ってるようになったなあ。そういうのは、忘れねえな。

十代の頃だと、高校を昭和35年の3月に卒業して、百姓をしながら地方の建設現場で働いた。その時の一日の労働賃金は270円。8時間労働で。分かるか？今で言えば、缶ジュース3本買えねえんだぞ。そして、東京さ出稼ぎに行ったら一日で労働賃金が400円くれえ。ほんで、みんな東京に出稼ぎに行くようになった。

そうしてるうちに原発の話が来て、大熊に原発が誘致された後は、原発で働くようになった。原発で働くと、東京さ出稼ぎに行くと同じくらいな労働賃金なの。一日だいたい400円くらい。だから、みんな出稼ぎをやめて、自分の家で百姓しながら原発で働くようになって。ん

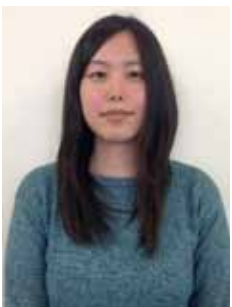
戦争が終わった後は、家が焼けっちゃったから、防空壕に1年くらい住んでいたべ。今の原発のそこは陸軍の飛行場で、我々家焼けた人にな、払い下げになったの。だから、みんな壊して好きなもの持ってこって言うんだ。ほんで、うちの親父はトタンとガラスもって来た。そして、掘っ立て小屋建ててな。そこに仮住まいしてた。俺は、防空壕に行ってたから、家が焼けることは見てないけど、帰って来たらすっかり燃えて、もう家なんかなかったわい。あんどきは、消すわけにもいかなかったんだわ。飛行機も飛んでくつべし。まあ、命だけあればな。

小学校一年生ぐらいの時には、アメリカ兵がジープに乗って家の近くまで来て、お菓子まいてくの。チョコレートとかキャラメルとか。初めはみんなおっかながって見てたけど、そのうち、一人が食べてみるとみんな食べ始めたんだ。チョコ

で、生計を立てて結婚して、子どもを育てて、これまでやってきたんだ。

今は、放射能の数値とかテレビでやってるけど、原発事故前の放射能のことは言わねえんだよ。な。いつも今の値しかやってねえ。元々、自然界の中にも放射能はあんのに、それについてはやんねえの。福島にだって東京にだって自然放射能はあるのに。そうそう、レントゲン検査とかでも放射能浴びるのにな。ちゃんと自然放射能について説明しなきゃいけねえよな。本当に。

俺は、早く除染とか復興が進んで、また大熊に戻りたいと思ってるよ。



聞き手
長谷川すずさん
(会津大学短期大学部
社会福祉学科2年)

お話を伺うことで、昔の暮らしや今後の課題について知り、とても勉強になりました。